

中国研究所時代の思い出～久保孝雄氏に聞く

- I. 私と中研との出会い
- II. 占領下、言論統制、出版検閲時代の中国研究所だった
- III. 共産党の強い影響(指導)下の中国研究所だった
- IV. 戦後初期、シンクタンクがまだなかった時代、研究機関が集積していた「政経ビル」は内外から注目されていたが、その中核が中国研究所だった

現在、中国研究所では『70年史』の編纂に向け資料の収集・整理を行っているところであるが、その一環として過去に中国研究所の活動にかかわった方々から当時の話を伺っている。今回は、1949年から1953年にかけて中研の事務局で活動なさっていた元神奈川県副知事久保孝雄氏にお話を伺った。久保氏は1929年、茨城県生まれ。インタビューにあるとおり中国研究所、労働調査協議会を経て神奈川県庁へ入り、1987年から91年まで県副知事。現在は神奈川県日中友好協会名誉顧問。著書に『知事と補佐官』などがある。

1949年から53年といえば中華人民共和国の成立から朝鮮戦争にかけての時代に当たる。一方、日本はGHQの占領からサンフランシスコ講和条約によって独立を回復する時期であり、内外共に激動の時代であった。この現在とは全く異なる状況下における中国研究所の動きを詳細に語っていただいた。なお、インタビューは2015年7月14日、中国研究所の事務室で、午後2時から約2時間にわたって行われた。聞き手は理事長の杉山と大里・川上両理事。インタビュー原稿の整理は杉山と事務局が担当した。(杉山文彦)

I. 私と中研との出会い

—大里：今日は中国研究所の初期の状況を伺いたいと思います。よろしくお願ひします。何もなくてはと思い、研究所の十周年を記念して1959年に刊行された『十年のあゆみ』という冊子を用意しました。

何しろ60年以上前のことですね。それから私の話はこれから聞いていただければわかると思いますが、中研の正史というよりも裏面史みたいな話になってしまうと思いますが、それでもよければ。

—大里：それはありがたいです。

私の中研に在籍したのは1949年(昭和24年)の初夏のころから53年の夏ごろまでだったと思います。私と中研の出会いですが、49年の初夏のころ、東京外国語大学の学生寮、これは中野の上高田にあったんですけど今は廃寮になっています。そこに1年先輩のTさんという人が訪ねてきてくれたんです。彼は当時、中国研究所に事務所のあった中国研究学生連絡会、中研連と言っていま

したけども、そこのメンバーでした。私はこのメンバーだったことはないんですが、東大、早稲田、慶應、立教、中央、外語などの学生が中心だったと聞いています。その彼が、日中貿易促進会と中国研究所に翻訳アルバイトの口がある、僕は日中貿易の方に行くので、君は中研に行かないかと言ってくれたんです。そのころの外語大の教育というのは、語学教育は別として、それ以外の教養科目というのか、それは非常に古ぼけた話ばかりで、特に中国については古典的な話しか講義してくれなかった。当時は中国の内戦というか、人民解放軍が怒濤のごとく南下して、大変な状況になっていたわけで、私はそれをとても知りたかったので、不満に思っているときに、中研にアルバイトの口があるって言われて、喜び勇んで応募したんです(笑)。そこで、事務局長の芝寛さんという人が面接をしてくれたんですが、非常に簡単な面接で、君はどのようにして中国語を選んだのか、中国をどう思うのか、という質問と、どうして君は共産党に入ったのかという質問だけでした。私の兄が2人、中国の戦争に行っていて、1人は戦死、もう1人も行方不明という状況だった。で、戦争中は、陸軍幼年学校を受験させられたり、士官学校の受験の準備をさせられたりしていて典型的な軍国主義少年で、天皇のために死ぬことを至上の価値と心得る少年でした。

その後、戦争が終わって混乱の時代に、ともかく東京に行けばなんとか生活物資が手に入る、少なくとも砂糖と醤油、塩は手に入れなきゃいかんというので、茨城の田舎から米だの大豆だの物々交換できるものを持って、鈴なりの常磐列車に乗って上京したんです。その時に御徒町のガード下に小さな本屋があって、そこに入ったとき、たまたま『中国の赤い星』というエドガー・スノーの“Red Star over China”という本があったんです。

—大里：それは翻訳ですか？

翻訳です。松岡洋子さんの抄訳です。全訳は宇佐美誠次郎さんの分厚いのが出ていますけど、そうじゃなくて抄訳です。

—大里：大分経ってから松岡さんが全訳されましたよ。それは私も末席でちょっとだけ翻訳をお手伝いしました。

私が読んだのは抄訳だから、半分くらいの本です。でも、エッセンスは出ていたと思うんです。私はそれを読んで非常に感動しました。兄2人は中国と戦争したけれども、弟である私は中国と仲良くする仕事をしたいと、一晩で意識改革したんです。徹夜で読み上げました。あのときの松岡さんが訳した文章はとても良かった。延安の洞窟の中で、毛沢東が語ったこと、それから劉少奇とか周恩来、彼らが話したことが、非常に鮮烈に頭に残りました。やっぱり、中国の未来は彼らの行く手にあると、彼らの創る中国がアジアのリーダーになったら、世界もアジアも大きく変わるんじゃないか、そんな希望に大きく胸がふくらんだんです。戦後の虚脱状態から私は救われました。そこで中国の勉強をしたいというので、受け持ちの先生の所に行きました。

—大里：それは外語大に入ってから？

外語大に入る前です。そうしたら受け持ちの先生がダメだと(笑)。法学部へ行けと言うんです。日本が負けたのは、政治家や軍人がダメだったからだけど、役人もダメだった。だから、法学部へ行ってお前は役人になれと。戦争中は軍人になれと言われていたのに、戦争が終わったら今度は役人に向いているからなれって言われた。では法学部も受けますよと答えたんですが、実際は受けないうで外語大だけ受験して入ったんです。そんなことがあったので、その経緯を芝面接官に話しました。

—大里：その前に日本共産党には入っていたんですか？

いえ、外語大に入り、ロシア語の学生との交流で気持ちが固まり、入党したんです。外語大3年生のときだったと思います。なぜ入ったかについては、日本も軍国主義の国から生まれ変わるには革命しなきゃ生まれ変わらないと考え、革命のために尽くしたいと思う、というようなことを面接で言いました。芝さんも根っからの共産党員でしたから、それがよかったんじゃないでしょうか。

中国研究所に入った当時、この『十年のあゆみ』にも名前がいろいろ出ていますけれど、私が覚えている人はお渡ししたメモに書いた通りです。所長は東大教授の平野義太郎さんです。彼の書いた『日本資本主義の機構』は古典的な名著と言われていました。「講座派」の理論家だったんです。それから事務局長は、今言った芝寛さんで、彼は「企画院事件」で服役中の豊多摩刑務所から出所したばかりの人です。東亜同文書院の卒業生で、東亜研究所にも多少関わったんじゃないでしょうか。後に共産党の東京都委員長までいきましたけど、反党分子として除名されて、その後は非共産党左翼として、長いこと活動されましたが、2010年に亡くなりました。

—杉山：芝さんの除名はいつごろですか？

この人は除名を何回も受けていますから(笑)。後ほど説明しますが、私も同じころに除名されました。それから幹部の研究員として有名だったのは岩村三千夫さん。彼は読売の出身ですね。それから尾崎庄太郎、浅川謙次。この2人はやはり戦後出所された方です。それから米沢秀夫さんというのは中国経済、それから貿易関係に非常に明るい人でした。とても温厚な人で、私もいろいろ教わりました。

—大里：上海におられたんですかね？

そうですね。それから野原四郎さんという人も非常に面白い人で、東洋史、中国の歴史、文化どれも明るい人で、温厚な人でした。それから幼方直吉さんという、どこかの私学に関わっておられたんじゃないかと思うんですけども、そこはよくわかりません。ただ、この人はなんだか私を嫌っていたのかな。私は貧乏な学生だったもんですから長髪で、下駄なんか履いて中研に行ったら呼び止められて、「そんな恰好で中研に来るな」とか言って注意されたんです(笑)。いい人なんですけどね。「お前背広はないのか」って言われて、「背広なんてあるわけじゃないですか」「うーん、そのうちなんとかしよう」とか言ってくれましたが(笑)、なんともしてくれなかったです。

それから昭和 25 (1950) 年の春に新人採用があったのですが、そのときに入ったメンバーもメモの通りです。本橋渥さんは後に横浜国立大の教授になり、アジア経済を担当した人です。私より大分年上ですけど、中研では同期です。彼は早稲田から読売の記者になって、しばしば取材とか勉強のために中国研究所に来ていたんですね。それで中研が気に入って、貧乏してもいいから中国研究所のスタッフになりたいって入ってこられた人です。それから佐藤剛弘さん。彼は東大文学部で中研連のメンバーだったと思います。その後どのような経緯をたどったのかはよく知りませんが、私が神奈川県庁に入って知事の補佐官をしていときに、私に会いに来ました。「久保君がいるのに米軍家族住宅を逗子に作らせる調停案づくりなんてとんでもない。どうして米軍ともっと徹底的に闘わないのか」なんて、私に抗議しに来たんです。そのときに「中研で一緒だった佐藤だよ」って言われてびっくりしました。それから水谷さんというのは立教の、やはり中研連ですね。中研を辞めた後は、信濃毎日の記者になって、最後は信越放送の役員になったというように聞いています。それから私ですね。これだけが、50 年の春にスタッフに新たに加わった。

—杉山：このころの方々には、一応の給料は出ていたんですか？

私は 5 千円もらいました。まだこのときには外語大の寮にいたのですが、給料日に 5 千円入ってというのを寮の皆が知っていたので、集まって一緒に中野へ行って、飯を食べたりしました。5 千円って今で言ったらどのくらいなんでしょうか。

—杉山：当時としては相当な額ですよ。

そうですよ。公務員の初任給が 6 千円ぐらいだった時代ですからね。だから今でいうと 15~16 万円ぐらいの感じだったのかもしれない。

—杉山：普通並に給料は出ていたんですね

ともかく千円札を持って、皆を連れて中野の北口へ行って全部支払いました。たらふく食べて帰れたんです。

—大里：新人の場合の処遇はどうなっているのですか？『十年のあゆみ』によると、所内では理事会が推薦した人だけが「所員」で、ほかは「一般会員」と呼んだと書いてあるんです。そうすると、差別化したわけですよ。

その区別はありました。だって、皆有名な研究者、学者で、私たちはそうじゃないですから。私は調査部員というように呼ばれていた気がします。調査部員というのは別に研究員ではないんです。

—大里：そうすると一般会員とも違うわけですね？メモに書かれている新人というのは。

いわゆる理事会で推薦された正規の所員ではないです。一人前の研究員じゃないってことですね。研究員見習いのような。だから調査部員というふうに言われていました。

それで『十年のあゆみ』にも名前が出ていますけれど、当時中研に出入りした関係者として、伊藤武雄さんや小沢正元、それから中西功ですね。中西さんはゾルゲ事件の被告で9月6日に死刑執行の予定だったんですが、ぎりぎりまで命永らえた人です。彼は後に、共産党の参議院議員になったんですが、50年のコミンフォルム批判をきっかけに、党中央に対して批判を強めて、いわゆる『中西功意見書』というのを出したんですが、これを党中央が受け取らないので、自費出版したんです。それを広く配布したので、分派活動ということで除名されて、その後共産党に戻りましたが、癌で早くに亡くなってしまいました。

いずれにしても東亜研究所とか満鉄調査部関係者が多かったです。私が聞いた限りでは、東亜研究所は国策研究所でしたので、GHQによって解散させられたんですね。その財産の一部を引き継いだのが中研だというふうに聞いたことがありますけれど、確かなことは知りません。

—杉山：中国研究所の書庫にはその時期の東亜研究所の蔵書があります。

それでは一部を引き継いだのかもしれませんが。

II. 占領下、言論統制、出版検閲時代の中国研究所だった

次の話になりますが、言論統制や出版物への検閲が行われていたことは、強い記憶として今も残っています。米軍の占領下で『人民日報』を持っているだけで、米軍の憲兵であるMP、ミリタリーポリスに逮捕されるという事件がいくつかありました。小さな記事でしたが、大阪外語大の学生が神戸でミリタリーポリスに逮捕されたという新聞記事を読んだことを覚えています。それで、私たちがひどく緊張したんです。その当時、私は中研から借り出した『人民日報』を外語大にときどき持って行っていたんです。何人かはとても興味を持って、「これが『人民日報』か」なんて集まってきたのですが、後は皆遠巻きにして、こわごわのぞいていたような状況でした。で、あるときに教授に呼ばれて、「これは大変なことになるから、これから二度と持ってくるな」と言われました(笑)。それから一切持って行きませんでした。そういう剣呑な時代でしたね。

—大里：今言われているのは49年の前ですか、それとも中国が中華人民共和国になってからでしょうか。

いいえ、49年の5月ごろから中研に通っていましたが、新中国ができたのは10月ですから数カ月前の話です。そのころ、新聞やラジオで盛んに人民解放軍の動きを追っていたんです。一つの国がまさに生まれようとする激動を息詰まるように見つめる状況下で、中研に通っていたんです。

—大里：米軍占領下で『人民日報』を持っているだけで逮捕されたというのは、そういった時期の事件でしょうか？

そうです。当時の中研の出版物は、『アジア経済旬報』と『中国研究月報』がありましてね、これはすべてGHQの検閲を受けることになっていたわけです。検閲部は東京駅の目の前の中央郵便局の2階か3階にありました。そこに行くと、顔は見えないんですが、窓口から手が出て来ます。私が雑誌を出すのを毛むくじらの白人の手が受け取っていた。

—大里：それは向こうからは見えるのでしょうか？

見ているのかわからないですけど、太い毛むくじらの手が、にゅっと出てきて、受け取るんです。

—大里：こういうものを提出されていたのですか？（以前に久保氏から寄贈されたプランゲ文庫の『中国研究所所報』 コピーを持って）

これです。それで、何度か発禁や記事の削除処分を受けたことがあります。いずれにしても米軍の批判とかアメリカの占領政策の批判と彼らが判断したものは全部発禁、あるいは削除になるわけです。同時に、「要翻訳」と赤で囲っている記事もありました。印刷物は全部日本語だけれども、アメリカに、占領軍にとっても必要だという記事を英語に訳せということだと思っただけですね。彼らのスタッフに訳させていたんです。

—大里：彼らのそういうメモが残っているんですね。

だから検閲部は、中研の出版物から必要な情報を得ていたんじゃないか、という気がしています。後に神奈川県職員になって、アメリカのメリーランド州と姉妹提携する仕事を担当したものですから、何度かメリーランド州へ行って、メリーランド大学にも行きました。そこにプランゲ・コレクションがあるという話を聞いたものですから、ぜひ見せてくれと言ったんです。プランゲ・コレクションというのは、当時の検閲責任者だったプランゲ大佐が、検閲済みの膨大な資料をメリーランド大学に寄付したものと聞きましたので、実は中国研究所というところで働いたことがあって、検閲部に出版物を提出したことがあると伝えたのです。そしてそれを検索するように頼んだんです。ただ、『アジア経済旬報』の方は出てこなくて、『中国研究所所報』の一部が30分くらいで出てきました。

—大里：このコピーはそこで手に入れたものだったんですか？

メリーランド大学のプランゲ・コレクションで、私がオファーして原本をコピーしてきてもらったものです。

—大里：そうでしたか。私もプランゲ文庫には一度行ったことがあります。

そのときにいろいろ見せてもらいましたが、日本共産党東芝堀川工場細胞機関紙とか、小田原とか湯河原辺りの青年団とか婦人団体のガリ版刷り、わら半紙の新聞まであったんです。このようなものまで検閲していたのかとびっくりしました。あのころは私信まで検閲していたわけですから、なるほどここまでやっていたのかと思いました。こんな下々の、草の根の動きまで気になったのかな、と思いました。青年団の機関紙なんか全然左翼的でもないシイデオロギー的でもないんだけど、そういうのもちゃんと検閲して、発行許可・不許可とかやっていたんですね。

占領下米軍の検閲の全貌というのはまだわかっていないんです。この間 NHK で放送したみたいですが、あの検閲に関わった日本のスタッフは 4500 名だということです。だけど当事者には非常に後ろめたい思いが今も強いようです。相当の方は亡くなっているんでしょうけどね。だからどういう形で、 どういう検閲をしたのか。プレスコードとかいろいろありましたけども、何を基準にして検閲したのか。そういうことは、本当は検閲した日本人が事実を詳しく明らかにしたらいいと思うんだけど、 大きな負い目があるようです。言論統制、言論検閲に加担したという罪の意識が強くて、とても全貌は語れないということだと聞きました。

プランゲ・コレクションで私が見た現物は、 ほとんどが戦後の非常に粗悪なわら半紙でつくられていましたから、どんどん溶けてきて、資料として価値がなくなってしまうような資料がいっぱいあった。そこでメリーランド大学は当時、資料の全てをマイクロフィルムに移し替えるという作業をしていたんです。ところが膨大な量ですからお金がかかるということで、 神奈川県に資金を援助して欲しいという正式な申し入れを受けたんです。帰って知事とも相談したんですが、占領軍による出版物の検閲というのは、国対国の話で、検閲されているものも、神奈川県のものだけではないから、この話はきちんと国に繋いで、国がしかるべき措置をすべきだということでした。そこで、竹下登さん、当時は官房長官だったか幹事長だったか忘れましたが、 彼が理解を示してくれて、やはり神奈川県に押し付けるわけにはいかない、国の方でしかるべき対応を考えますということを書いてくれました。

—大里：それで、 その後国立国会図書館がマイクロ化を引き継いで完成させたのですね。そして、そのマイクロフィルムを当時日本の三つの大学が購入して、そのうちの一つが神奈川大学の図書館にあります。コレクションの全てではないと思いますけれど。

当時、中国関係の資料は香港経由で入ってきていたんですけど、基本的に船便でしたから、1、2 カ月遅れで、 研究者には不便だったんです。そこで最新資料を得るために、今で言うアングラ活動をやりました。某国大使館のルート、それから華僑系のルート、朝鮮総連系のルートがありました。

—大里：「某国」というのはなんですか？

後でわかります。で、私は中研の職員というだけでなく、古書店の身分も与えられていたんです。なんですかって聞いたら、まあそのうちわかるよ、とかなんとか言われてね。それで大使館ルート

を担当させられたんです。レジスタンス映画さながらの、非常に緊張感ある仕事をさせられました。一部の状況を説明しますと、今でいう後樂園の裏だと思んですけど、空襲でめちゃくちゃになっている瓦礫の中、人間の丈ぐらいある草がぼうぼうと生えているんです。そこに私ともう1人の同僚が、労務者風に変装して、身をやつしてリヤカーを曳いて潜んでいるわけです。そうすると、しばらくして夕闇が迫るころ、黒塗りじゃないんだな、濃紺の大型の乗用車が瓦礫をガタガタ言わせながら入ってくるんです。それである所に来てパッと止まると中から屈強な男が飛び出して、トランクを開けて、大きな南京袋を二つ、ボン、ボンと草むらに投げ込むんです。そしてまた音も無く、なんて静かな話じゃない(笑)、ガタガタ音を立てながら、その外交官ナンバーの車が去っていくわけです。車が見えなくなってから、私と同僚はやおら草むらからリヤカーを引っ張り出して、その南京袋を二つ積み、その上にカモフラージュとして古新聞、古雑誌、古本を載せるんです。そうして水道橋の駅から神保町へそれを曳いていくわけです。裏道を通りましたが、もし検問されて、何を積んでいるんだって聞かれたら、古本屋の名刺を出して、「私はこういう者です、古本の整理で大変なんです」とか言って逃れるということにしていたんです。

—大里：そういう危ない目にあつたことはありますか？

実際には何もなかったですよ(笑)。それから某国大使館との間で合言葉の打ち合わせもあったようです。だけど実際は使わなかったです。彼らは無言のまま置いてパーッと行っちゃいますからね。私たちが出て行って、合言葉なんかやる暇もない(笑)。彼らも何かに怯えているようで、サーッと行っちゃう。私たちだって何が起こるかわからないし、車がいなくなったらサッと出て行って、パッと積み込むんです。南京袋って重いです。中に入っているものは本と資料ですからね。で、それを神保町のしもたや、表にはなんとか書店って書いてありました。要は古本屋だってことになっているんです。中に広い板の間がありましてね、そこに担ぎ込んで、ぶちまけるわけです。そうすると名前も知らない、顔も初めて見たような男たちが3、4人来ているんです。だからあれは中研だけのルートじゃなかったと思うんですね。

—大里：その情報が必要なところから言いつかつた。

そう。今も真相はよくわかりません。けどそこには、コミンフォルムの機関紙もあったんです。“For lasting peace and people’s democracy”という題名、タブロイド判の英文の新聞です。で、これだけをサッと持ってスーツと出て行っちゃった人もいます。それから中国語のものも、『人民日報』のほかに『新華月報』とか『大公報』とか、これは中研が持って行くわけです。ただ、私は運ばなかった。本橋さんなんか来ていましたから、そういう人が持って行くわけです。そのほかに『ソ連共産党史』括弧して「ボ」って書いてある。ボリシェヴィキの「ボ」ですね、その上下2冊が何セットか。これは当時、共産党員の必読文献ですから非常に価値があるものだった。私も喉から手が出るほど欲しかったです。皮製の上製本でした。でもまさか、勝手に取るわけにはいかない(笑)。そういうものや、ソ連共産党の『コムニスト』という機関紙。それから『経済学の諸問題』とか、全部は覚えていませんけど、英文・ロシア文・中国文の日本では簡単に手に入ら

ないものが、南京袋から出てくるわけです。それを、お互いに名前も所属も知らない人間同士が集まって、分配して終わるんです。それを私は2回やったかな、2回か3回やりました。だけれども、アングラ活動ですから非常に緊張感のある仕事でした。だからその後は危険なことは止めようということになったんだろうと思います。他にもいたかもしれませんが、私は2回くらいで、終わりました。

—大里：それも49年ですか？

49年から50年。正確な時期は覚えていません。50年には朝鮮戦争が始まりますし、戦犯追放やレッドパージがどんどん吹き荒れるわけですから、大変な時代であったことも事実ですね。

—大里：なるほど。そういう資料というのは中研のなかで、活用されたのですか？

そうです。私たちが危ない橋を渡って運んできたのを、偉い先生方が何食わぬ顔して「うんいい資料だ」なんてやっているわけです(笑)。「某国」大使館というのは、もうおわかりだと思うんですけど、ソ連大使館です。私が面接を受けたときに、少しはロシア語がわかるのかと聞かれたのですが、少しはわかると答えたときに「ああ、それはいいな」なんて言っていたのも、これを予定していたんですね。

Ⅲ. 共産党の強い影響(指導) 下の中国研究所だった

次の話に行きますけれど、中研というのは今と違って、共産党の影響力が非常に強い研究所だったんです。主なスタッフ、関係者の多くは非転向の黨員でした。獄中から出てきた人が多かったんです。尾崎庄太郎さんも、浅川謙次さんも、中西功さんもそうです。中西功さんはゾルゲ事件の死刑囚でした。芝さんも出所組です。それから岩村さんとか米沢、野原、幼方さん、彼らは非黨員ですけども、シンパだったんですね。50年春に採用された我々、本橋、佐藤、水谷、久保、これもほとんど黨員だったと思います。黨員しか採用しないという方針だったのかもしれないね。それで、主要なメンバーは共産黨員だったので、中研の活動方針、調査研究方針、経営方針は、理事会や事務局会議で決める前に、細胞会議で決めていました。しかも中研細胞は地区委員会所属ではなくて、党本部直属だったんです。ですから中国研究所の中国研究の基本方針も、党本部から直接、指示・指導されていたと言ってもいいんじゃないかと思います。なぜそのようなことをしたのかというと、中国革命をどう評価するのか、ということは、日本共産党の戦略問題と関わってくるからです。ですから非常に神経質になっていたんだろうと思います。

それから当時、昭和24年に団体等規制令というのがつくられまして、共産黨員は名簿を提出するという事になったんです。これは破防法ができてから廃止になったんですが、私が中研にいるときに、名簿を出せということになりました。で、偉い先生方は「僕らの名前を出すわけにはいかない。若い者でやってくれないか」と言って。私たち若い者4人が、団体等規制令による提出名簿のなかに入ったわけです。そうしたら、まもなく田舎の父から連絡があって、警察が来て、お前が

共産党に入って活動していと言われた。「お宅の息子はまだ若いし将来性があるんだから、共産党なんて早く辞めるように、ちゃんと注意したほうがいいぞ」と言ってきた、どうなっているんだ、という連絡があったんです。ですから私の体験上、団体等規制令による名簿提出は、全部警察に筒抜けであったということです。

それから当時の中研の定例研究会。私たちは正規の所員、研究員じゃなかったので、毎回出たわけではないんですが、ときどき傍聴していると、中央官庁の経済官庁、外務省とか経済界の人も結構来ていましたね。ほかに中国を研究しているところがなかったからかもしれませんけれど、毎回、そういう人たちが熱心に来ていました。そこで舌鋒鋭く議論をリードしたのは中西功だったと思います。彼は命がけで中国共産党と関わってきた人ですから、中国のことは非常によく知っていたわけで、当然だったと思います。しかも彼は満鉄調査部にいて、中国の経済や社会を研究していましたからね。それから米沢さんの経済報告も非常にユニークで、大変喜ばれていましたし、野原さんの文化関係のレポートも評価が高かったと記憶しています。

—大里：定例研究会っていうのは所員の研究会ですか？ そうだとすると中研では一番、権威のある会ということでしょうか。

そうですね。

—杉山：これはどのくらいの頻度で開催していましたか？ 月に1回くらいでしょうか。

最低、月1回はやっていました。テーマが政治だったり経済だったりいろいろありますから。

—杉山：『月報』の最初のころは、『中国研究所所報』という名称で刊行していましたが、それに研究会の報告が載っています。掲載されている報告は、大部分が定例研究会だったのでしょうか？

私たちは下働きで、編集活動まではやっていなかったからわかりませんが、当然そうだったのではないのでしょうか。

—大里：そうすると、定例研究会には役人が出席していて、久保先生のように直接中研に関わっている人でも、スツとは入れなかったんですか？

スペースの問題もありますからね。そんなに大きな会議室があったわけではないですし、講師の後ろに陪席みたいな恰好で座りますから、人数も制限されてましたね。それと理事会というのがときどきあったんですが、これには文部省だの、通産省みたいなところも来てましたね。理事会という所内が緊張してね。お茶は何出すか、お茶菓子は何にするかとかやっていました。

—大里：そうすると、中研内に共産党員が多くて、非常に重要だという位置付けで、細胞会議が

あるというのも当然かもしれませんね。理事会とは別にその前にやっていないと、議論をリードできないという事情があったのでしょうかね。

—杉山：しかし一方で、は官庁関係者が顔を出していたんですね。

—大里：だから理事会は、ある意味では開けた感じだったわけでしょうね。

そうですね。私は平野義太郎所長の秘書みたいなこと、カバン持ちをしばらくやったことがあるんです。そのときは綺麗な洋服を着て、下駄じゃなくて靴を履いて行きました。予算の関係だったのかもしれませんが、文部省かなんかに一緒に付いて行ったことがあります。だから国から出ていたお金では、文部省の予算が一番多かったんじゃないでしょうか。

—大里：先日、60年代の話を当時職員だった方に聞いたら、文部省から助成金みたいなものを何十万円か、何の義務労働もなくもらっていたって言っていましたよ。

中研ファンみたいな人がいたみたいですよ。要するに中国研究が大事だっていう人たちです。話を先に進めますけど、スタッフに党員が多くて共産党の影響が強かったことから、同時に共産党の党内闘争の影響も受けやすかったということがあるんです。特に共産党・労働者党情報局(コミンフォルム)から、50年の何月でしたか、先ほど言った、『恒久平和と人民民主主義のために』という機関紙に日本共産党の路線をきびしく批判する論評が出たんです。日本共産党はアメリカに対する評価が甘い、アメリカの占領下で、議会を通して平和革命ができるなんてナンセンスだというような、かなり激しい批判が出ました。

これで党内がガタガタになったんです、野坂参三が自己批判するとか。これに対して最初、日本共産党はコミンフォルム批判に対する「所感」というものを出して、批判されていることはもっともだけど、我々はとっくに乗り越えている、きちんと対応している、というのを出したんです。これが後に「所感派」といわれる主流派になる人たちですね。これに対して。そんなことはない、やっぱりコミンフォルムの批判をもっと真剣に受け止めて路線転換を図るべきだというグループに分かれて。こちらは「国際派」といわれました。トップは宮本顕治と志賀義雄などです。「所感派」の主流の代表は徳田球一などでした。

ところが、GHQから共産党中央委員27名でしたか、全員追放され、さらに『赤旗』の発行が停止になりました。それで共産党の活動は事実上非合法化された。幹部が公職追放されて表だって活動できませんから、アングラ活動になっていった。そこから武装闘争という路線が強くなってきて、あちこちで火炎瓶事件を起こすことになった。そのころまた、三鷹事件とか松川事件とか、当局フレームアップもからんだような怪奇な事件が頻発した。いかにも共産党が暴力革命を目指しているみたいな事件があちこちで起きて、共産党がすっかり孤立させられ、衰退していくというのがこの辺で、起こったと思うんですね。で、中研のスタッフのなかにも当然その影響が出まして、「国際派」のなかに『中西功意見書』を支持するグループがつくられたんです。それにさっき言った芝さんとか本橋さんとか私とか佐藤さんとか、それから事務局にいたEさんと言ったかたが入った

のですが、これは全員分派活動を理由に除名され、中研からいわば追放されるという形で、辞めることになったわけです。

—大里：そういう場合の除名追放というのは、具体的にはどのようなことでしょうか？ 文字通り、お前はもう除名だ、出て行け、ということだったのでしょうか。

本当は除名イコール中国研究所の職員じゃなくなるって意味ではないんです。党と研究所は本来別ですから。ですが實際上、中国研究所の研究と経営を支配していたのは、共産党細胞でしたから。とても居続けることはできないというので、全員が辞めてしまったんです。

—大里：今お名前の挙がった方は辞めたけれど、そうではない人はどうなりましたか？

ほかは「所感派」で主流派に残ったんです。

—杉山：この除名というのは中研からの除名ですか？ 党からの除名ですか？

党からの除名で、中国研究所は別にクビになったわけじゃないけれど、自主退職していったわけです(注：久保氏はスターリン批判後の58年に共産党を離党している)。

—大里：その場合の「所感派」の中心的な方はどなたですか？

やはり尾崎庄太郎とか浅川謙次とかですね。彼らもその後文革派と反対派でさらに割れたようですけど、その後のことはよく知りません。

—杉山：浅川さんと尾崎さんは「所感派」だったんですね？

そうです。私は中研の最後のころに、中国の労働問題を担当させられたんです。中国でも労働組合法ができたか労働関係の法規がいろいろでき始めたので、それらを翻訳して、きちんと紹介したほうがいいということになって、その仕事を始めたのですが、翻訳しているうちに、わからない、難しい専門用語も出てきたんです。そこで当時、労働調査協議会という、産業別労働組合会議、共産党系の産別会議と、中立系の組合が共同でつくった労働問題の調査研究機関があったんですね。そこに私は勉強のために出入りしていた。そこには学者もいましたから、いろいろ教わったりしていたので、中研を辞めることになったときに、向こうから来てくれないかと言われて、芝寛も一緒に移ったんです。こうして私は労働問題の研究者になったんです。賃金問題、労働経済問題だけでなく労働運動理論、労働組合論とか、そういうのを猛烈に勉強しました。当時は戦後労働運動が最も高揚した時期ですから、非常にニーズもあったんです。それから数年経ってからY紙のコラム欄に、労働問題のコラムを書かされるようになりました。だからいつの間にか中国問題を離れて、労働問題の専門家ってほどではなかったんですけど、そういう変身を遂げざるを得なかったと

いうことがありました。

IV. 戦後初期、シンクタンクがまだなかった時代、研究機関が集積していた「政経ビル」は内外から注目されていたが、その中核が中国研究所だった

次の話になりますが、当時中研があったのは御茶ノ水駅近くの「政経ビル」ですけれども、ここは中研のほかに、政治経済研究所、世界経済研究所、国民経済研究協会、民主主義科学者協会、産業労働調査所などの研究機関が集積していました。国民経済研究協会は理事長が稲葉秀三でしたが、ここを除いてすべて左翼系だったので、このビルは「赤いビル」と呼ばれていたんです。

中国研究所はどういうわけか、館内に連絡協議会を作るとか共同の研究会をやろうとか、そういう提唱をしたりして中研の枠を超えた活動をいろいろやっていたものですから、政経ビルのいわば中核的な存在だったと言っていると思います。これも当時、共産党の指示だったかどうかわかりませんが、研究所に労働組合をつくって、その連合体をつくろうという動きがあって、まず中国研究所労働組合というのをつくったんです。委員長が本橋さんで、書記長が私なんです。今から思うと笑い話みたいだけど。それで、主要研究機関に呼びかけて、全国研究機関労組連絡会、全研連というのをつくったんです。これの連絡会の議長も本橋さんで、事務局長が私です。こういうものも中研中心でつくったわけです。だけどいくら呼びかけても研究者は入ってこないんです。「なに？労働組合？いやあ」とかなんとか言って。それで、入ってきたのは事務員だけです。でも、非常に熱心なところもありましてね、活動家が何人か入ってきてくれました。

そしてこの全研連が52年の例の「血のメーデー事件」のときに全研連の旗を掲げて、祝田橋から宮城広場に入って行ったんです。そんな元気がどこにあったのかって、今でも思うんです。あのときは大変な騒ぎになりましてね。あのころは機動隊っていうのはなかったんです。警察予備隊と言っていたんですけど。はじめは、警棒を振るってデモ隊を追い返していたんだけど、だんだんデモ隊が増えてきて、最後は5、6千人に膨れ上がったんですね。警官隊も最初は500人くらいだった。それがやがて応援隊が出てきて、2千人以上になった。それでも対応できないというので、はじめは警棒をふるっていたのに、催涙弾とピストルを使い始めたんです。ピストルは威嚇射撃だっていう説があるんだけど実弾が入っていたんじゃないかとの説もある。私たちは先頭部隊ではなくて中間あたりにいたんですけど、警官隊の催涙弾とピストルで押し返されて、ワーンとデモ隊が逃げだした。そのなかに全研連の旗も飲み込まれて、あつというまに押し倒されていった。そのなかの1人が警棒で打たれて倒れたんです。そこに国民救援会というのがあって、「負傷者はどこだ！」と言われたので、「ここにいます」って言ったら、さっと担架に載せて連れて行ってくれたんです。運ばれた人は、私に中研のアルバイトを紹介してくれた人だから、見捨てるわけにはいかないと思って、救援隊の人に「どこに入院するんですか？」って聞いたら、慈恵会だと言うので、後で見舞いに行ったら、頭にぐるぐる包帯を巻いて寝ているんです。そこへ看護婦が来て、「あんた友だちか？」「そうだ」「どっかへ連れて行きなさい。もう少ししたら警官が来て、ここで負傷して寝ている人は皆逮捕されますよ」って、私に言うんです。あのときの慈恵会病院の労働組合は強かったんです。看護婦もしっかりしていました。「この人の友だちなら、すぐここから担ぎ出せ、

と言うので、それで担ぎ出したんです。Yさんっていう、私立大学の先生で、アメリカ問題の専門家の自宅へ運べて、芝寛が言ってきたんですよ。このYさんの自宅というのが、今で言うと小田急の生田の奥のほう、多摩丘陵の中というか、別荘地のような閑静なところにあったんです。誰かの隠れ家みたいなね(笑)。

—杉山：そこまでどうやって運んだんですか？

運んだのは私じゃないからわかりません。家宅捜索を必ずやられるから、彼の自宅に行って整理しろという指示があったんです。私は何回か行ったことあるんですが、下十条です。駅から歩いて10分くらいの距離をとにかく走ってね。下宿のおばさんに「何しに来たの？」なんて言われたけれど「いや、ちょっと忘れものだよ」とかなんとか言って、名簿などを整理しました。彼の兄は、海兵から戻ってきて水産大学、今の海洋大学を出て、T県庁の職員になって、一緒に住んでいたんです。それで後で聞いたら、「久保さんが来た2時間後に警官が3人来た」って(笑)。だから助かったんですよ。彼は本名はTくんというんですが、埼玉の高校から外語大に来た人です。1年後にY先生の家から出て復職したんですが、そのときにHというペンネームで仕事を始めました。彼も労働問題の専門家になって、賃金論で非常によく勉強して論文を書いて、それが買われて電電公社の組合、全電通の労働組合に望まれて、本部の書記に入って、最後は役員待遇にもなったはずですよ。

—大里：つまり怪我をして1年くらいはY先生のところにいたんですか？そんなにひどい怪我をしたんですか？1年経つぐらい。

「それが原因で俺はすっかり頭が悪くなったんだ」って言っていたけどそれは関係ないと思う(笑)。でも相当叩かれましたからね。

あの時の、メーデー事件で起訴されて裁判になった人たちのその後の人生は、なかなか就職もできないで気の毒でしたね。彼は何とかそれは免れた。

このメーデー事件にはこんなエピソードもあります。当時、私は三鷹の元・中島飛行機の寮に住んでいたんですが、その日の夕方、自宅に帰るのに吉祥寺駅からバスに乗って帰ろうと、バス乗り場の出口に向かって行ったら、警官が改札口の両側に立って、検問をやっているわけです。引き立てられて尋問されている人もいます。これは私も危ないなあと思ったんです。でも何気なく普通のサラリーマンのような顔してスーッと通った。お巡りさんが私には注目もしないんです。そして家に帰って、一晩過ぎた。そうしたら朝、ドンとドアを叩く音がする。「なんですか？」って言って廊下に出たら隣の奥さんで、この人も旦那は左翼だったんですが、「久保さん大変だ!」「なんですか?」「このアパートは警官隊に固まっています。久保さん、大丈夫ですか!」と言っている(笑)。それで私がそっと2階から窓を開けたら、まわりは畑でしたから、朝霞に包まれて遠くは見えない。家の下を見たら警官が並んでいるんです。これは「とうとう来たな」と思って、歯ブラシとか洗面具ぐらいを用意したんですよ。それから着替えてじっと待っていた。ところがいつまでたっても来ないんです(笑)。それで、「なんだ、僕じゃないんだ」と思ってまた下を見たらもう警官隊がいないんです。しばらくしたら、三鷹の全日自労、ニコヨンといわれていた失業中の日雇い労働者の

組合の委員長が1階にいたんですが、その人が逮捕されたんです。だからさっき私のところに来た奥さんが、「久保さんじゃなかった！、良かったよかった」って(笑)。あのときは、全日自労の三鷹分会が一番戦闘的だといわれていましたからね。今でもあの日のことは覚えていますよ。警官に両腕を抱えられて霧の中に消えていく、全日自労の三鷹分会の分会長さん。「血のメーデー」ではそんなこともあったんです

—大里：そのとき、身分としては、もう大学を卒業しているのですか？ 就職して、それで、「血のメーデー」に参加されたと(笑)。

そうです。あのころはほとんどすべてのデモに参加していました。だから研究やっていたのか、デモやっていたのかわからないくらい、「デモ暮らし」などと言っていました(笑)。とにかくあのころは皆、特に若者は元気でした。

それから、当時だからあまり違和感はなかったのですが、共産党系の研究機関の研究活動を、党中央の方針に沿って、指導・監督することが行われていたわけです。これをやっていたのは、世界経済研究所のM教授です。ご存じないかもしれませんが、そういう役割の人がいまして、各研究所の細胞指導部と接触して、いわばコミッサー、政治委員的な役割を果たしていたんじゃないかと思います。だからGHQだけじゃなくて、共産党もまた中国研究所とか、いくつかの研究機関の研究成果を自らの政策方針のために活用していた。党の調査研究機能の一部をこういう研究機関に代行させていたんじゃないか、という気がしますね(笑)。今は共産党中央委員会も随分スタッフが充実しているようですから、そんなことないかもしれませんが、当時は研究所みたいなもの、今で言うシンクタンクが少なかったんです。だから後で思ったんですけども、58年だったかにアジ研というのができましたが、政府がアジ研をつくった呼び水の一つはやっぱり中国研究所だったんじゃないかな、という気がしています。その後しばらくして、いろいろな形でシンクタンクがつくられるようになってきた、いわばそのハシリだったのは中研とか、政経ビルに集まっていた左翼系の研究所だったんじゃないかという気がしています。

それで、最後になりますが、私の中研時代からからすでに60年余りが過ぎているんですが、今でも強く記憶に残っているのは、調査研究の中身じゃなくて(笑)、これまで申し上げたようなことです。連合国、実際は米軍ですけど、その占領下で、言論、出版の自由もなく。プライベート・レターまで検閲され、レッド・ページが吹き荒れた時代。国交のなかった中国の資料の入手は困難を極めて、合法、非合法の手段を模索せざるを得なかった当時の研究環境は、現在からはもう、想像を絶するほど困難、かつ異常な時代だったと言っていると思います。同時に、戦後労働運動が未曾有の高揚期であったことも事実です。2・1ストはGHQに中止を命じられましたけど、国鉄とか炭労とか、運輸の動脈やエネルギーの根幹、あのころは石炭ですからね。国鉄、炭労、それから電産。今は電労連というのは皆、原発推進になっていますが、昔の電産はそんなことはなくて、非常に大きな力を持っていました。そういった労働組合がストライキに入ると日本全体が麻痺する、そういう時代だったんです。だから非常に労働運動の力が大きかった。共産党もまだまだ力があつた時代で、革命前夜というような雰囲気さえあつたんです。後で思えば米軍占領下のことで、結局全部幻想に終わったんですけどね。

そういう疾風怒涛の時代における中国研究であったということです。ただ、新中国が生まれるその陣痛の苦しき、痛み、そういうものと1949年から50年のころ、私たちは付き合っていたわけですよ。新しい国の誕生に付き合う—これは誠に希有な経験だった。だけど日本の新聞は、新中国の成立の記事も本当に小さかったです。私はあのとき、日本のマスコミに失望したんです。なぜかという、台湾に移った中華民国との国交があって、新中国との国交はなかったものですから、外交的配慮だと思うんですけども、ともかく新中国の動向については非常に冷淡な報道しかなかったということは、今もよく覚えています。

—杉山：私はそんなに見ていないんですけど、あの時期の新聞は確かに中国の報道が思いのほか少ないですよ。それは本当に不思議に思いました。

新中国が誕生したことの世界的意味とか時代的な背景、そういう記事は全然なかったです。

私の中研との出会いは、先輩が寮に来て、翻訳のアルバイトがあるから行かないかと言われたことに始まる、非常に偶然的なきっかけで関係を持つようになったんですけど、しかしそこをスタートにして次つぎに新しい仕事につながって、最後は神奈川県庁まで行くようになったんです。そういう意味では、中研で最初の職を得たというのは、私の一生にとって非常に重い意味のあることだったという気がしています。さっき言ったみたいに、兄が2人中国と戦争して戦死しているし、中国が憎い、いつか仇をとってやろうなんて思っていた少年が『中国の赤い星』を読んで大きく変わっていった。また、これも戦争中だったと思うんですが、朝日新聞かな、「モンゴル草原にて」という写真入りのコラムがあったんです。それを読んで大陸というかモンゴルの雄大な草原に行ってみたい、こういうところから何か記事を送って、皆に読んでもらえるような、そういう仕事もいいんじゃないかと思ったことも外語大に行ったもう一つの動機だったんです。希望と現実はまったく違いましたけれど(笑)。

—大里：とても面白いです。そうすると、中研に集まっている研究者、一定の実績を持ったような方も、新しい人もいて、そういう研究者とは違う仕事というか、任務を与えられたわけですよ？そういうときに、中国研究をやっている中研に集った研究者には、どんな印象を持ちましたか？つまり、組合運動やっても研究者は反応悪いという。ひたすら研究をやっているってことでしょうか。

岩村さんは別として、尾崎さんにしろ、浅川さんにしろ芝さんにしろ、皆、獄中体験者です。非転向で頑張ってきた人たちだと思うんだけど、大御所になられて汚れ役みたいなことは関係ない感じでした。たとえば団体等規制令のときだって若いもんがやってくれよ、っていうようなことですしね。それから、資料集めだって古本屋の社員にまでさせられたわけだからね(笑)。二枚看板で仕事させられたわけですよ。あのころ私は共産党員で、革命への使命感に燃えていたから、何でも引き受けるっていう気持ちでやれたんです。今の若い人にはとてもできないしやらせてもいけないですね。だから時代がそうさせたということも言えます。占領下で、米軍のミリタリーポリスまで日本人の反米、反占領軍活動を見張っていた時代ですから。だから今の人には軍事占領下の感

覚がわからないと思うんです。私たちが必死になって集めてきた資料を「なかなかいい資料だな」とか言っていた幹部研究員も感覚的に少しずれていましたね。

これは私の唯一の文学作品なのですが、『久保孝雄詩歌集——はるかなる青春』を差し上げます。これに少し中研時代の歌があります。「中国研究所に就職してお茶の水に通う」というページです

「温顔にてわれを雇える事務局長は 豊多摩刑務所の思想犯なりし人」

「数日の鞆持ちせるにわが所長 自著にサインして吾に給うなり」

これは平野義太郎さんから本をもらったことです。

「定期的に人民日報など届けきて そそくさと去る丈高き人」

国交がないので中国資料はアングラから入っていました。

「毛沢東・劉少奇らの論文の 下訳命じられ雀躍するわれ」

「天安門に毛沢東の声甲高く 中華人民共和国今天成立了」

「群を抜く舌鋒鋭き理論家は ゴルゲ事件の死刑囚なりしと」

中西功さんと初めて出会った時のことです。

「宴にてロシア民謡所望せるは 死線超えきし政治犯なりき」

「毛沢東は無謬なり否さにあらず 激論の果てしたたかに酔う」

「長髪を刈れ 背広で勤めよと いいしわが理事を宴の席で首絞めにけり」

これは幼方さんのことです。本当に首絞めたわけではありませんが(笑)。いろいろありましたけど、これが私の青春時代です。石川真澄(朝日の編集委員)さんが『アサヒグラフ』の書評で紹介してくれました。

—大里：ありがとうございます。

中研は私の青春そのものなんです。

(久保孝雄氏の話はさらに続き、労働調査協議会時代のこと、茨城県取手の町議会議員時代のこと、神奈川県副知事時代のことなど興味深い内容であったが、中国研究所のこととはやや離れるので割愛した。)

—『中国研究月報』2015年10月号—

〈中研70年史〉

その2 インタビュー